

---

# 次元戦記ディスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

江玖糸亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

次元戦記デイスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

### 【Nコード】

N7238U

### 【作者名】

江玖糸亜

### 【あらすじ】

少年が目覚めるとそこは牢獄の中だった。  
そこで出会ったとあるプリニー教育係とその仲間たち。  
そこは『地獄』という『アクターレ大統領』と呼ばれる悪魔が治める魔界の最下層であり死者が罪を償う場であつた……

この物語は三ヶ月後、少年がいつも通り仲間たちと共に『時空の渡し人』に転移を頼んだ時、突如暴走した『時空の穴』に飲まれとある次元世界へ飛ばされたところから始動する

（注、物語が先に進んでから新たに原作が増えることがあります。）

## プロローグ（前書き）

最初は出会いの場面からです。

## プロローグ

「……………んっ？」

薄暗い独房の中、一人の少年が目を覚ました。

「……………」

周囲には見覚えのない景色。というより少年は牢屋の中に入ったこと自体が初めてだったので見覚えなどあるはずもないのだが。

「……………え〜っと」

少年は自分がどうしてここにいるのかを必死に思いだそうと頭をひねった。

と、何者かの足音が響いてくる。

「こいつか。フェンリツヒよ」

「はっ。この者がそうです。ヴァル様」

少年は姿を見せた二人の男を観察した。

一人は黒いマントに黒い髪で赤い目と発達した犬歯が異様に似合っている青年だった。

もう一人の男は長い銀髪に赤いジャケットを羽織った金色の瞳をした細身の筋肉質の青年だ。

「ふむ……」

黒い方の青年が少年をじっくりと観察し始める。

「……確かに、随分と珍しい波長の魂だ。これではどのプリニーの皮にも合うまい」

黒い青年は一人で納得したように頷いている。

「いかなさいましょう。ヴァル様。このままにしておいても勝手に消滅すると思いますから放置するべきだと愚考<sup>ぐこう</sup>致しますが？」

「却下だ。フェンリツヒよ。確か倉庫にプリニーの帽子が余っていたはずだな？」

黒い青年の言葉に銀髪の青年は肯定の言葉を返す。

「はつ。しかし閣下。まさかとは思いますが

」

「無論。ここに送られてきた以上、俺にはこの小憎を立派なプリニーにする義務がある」

黒い青年はマントで身をくるむ。

次の瞬間、黒いマントを大きく翻しながら青年は叫ぶ。

「そうっ！！ プリニー教育係としての使命感が俺の心を熱く滾<sup>たぎ</sup>らせているのだっ！！」

「その本来の自分を完全にお忘れになっているにもかかわらず、堂々とした立ち振る舞い……このフェンリッヒ、改めて閣下の恐るべき能力に感服いたしました。」

褒めているのか馬鹿にしているのかよくわからないことを言った銀髪の青年は黒い青年に深々と頭を下げた。

「では閣下。倉庫にプリニー帽子を取りに行つて参ります」

「うむ。頼んだぞフェンリッヒ」

銀髪の青年は黒い青年の言葉を受けるとそのままどこかへと歩き去つて行つた。

「小憎。名は何と言う」

「……ミナト・アサギリ」

事の成り行きを沈黙を持つて見つめていた少年は黒い青年の不意の問いかけに冷静に答えた。

黒い青年は満足したように首を縦に振ると。

「喜べ。俺が貴様を一人前のプリニーにしてやる」

「……………」

少年は黒い青年が何を言っているのかわからなかったので沈黙するしかなかった。

「……一つ訊いても良いですか」

「なんだ」

「……トイレってどこですか」

「……………」

黒い青年は少しの間、黙考<sup>もっこう</sup>してから口を開く。

「……フェンリツヒが戻ってくるまで待て」



## プロローグ（後書き）

最初は主人公とあの二人しか登場しませんでした……  
次は三ヶ月後、転移したところから始める予定です。

## 第一話 次元転移しました。（前書き）

こちらの方は休日などで時間があるときに続きを投稿したいと思います。

というわけで次元転移してしまった後から始まります。

## 第一話 次元転移しました。

「…………えーっと…………」

壊れたビルと瓦礫<sup>がれき</sup>に囲まれた廃墟。

黒いプリニー帽をかぶった少年      ミナトは三か月前と同じ  
ように見覚えのない風景に途方に暮れながらどうして自分がここに  
いるのかを思い出していた。

あの日、地獄で目覚めてから三カ月。

最初のころは地獄での生活やヴァル閣下の教育で大変だったが二週間ほどしたら慣れてきて、ヴァル閣下にも良く褒められたものだった。

「お前は俺が教えたプリニーの中で最上位のプリニーになるかもしれないな」

とすら言われた。

そんな地獄での日々を過ごしていたのだが、今日ヴァル閣下たちといつも通り訓練のために『時空の渡し人』に訓練場まで転移させてもらおうとした時、突如『時空の穴』が暴走してヴァル閣下たちと共にいずこかへと転移させられたのだった。

「そうだった……！！      みんなは！？」

ミナトは慌てて仲間を探し始めた。

「ヴァル閣下っっ！！ フェンっちっっ！！ 風祭っっ！！ デス  
コっっ！！ アルティナっっ！！ エミっっ！！」

大きな声で叫んでも返事は返ってこない。

「まったくもう。みんなどこ行ったんだよう」

悪態をつきながら近くの小石を蹴飛ばした。

飛んで行った小石は何かにぶつかった。

「……んっ？」

何かがこちらに振り向く。

「ドラゴン？ どうしてこんなところに？」

話し掛けるも答えは無く咆哮ほうこうを上げながらドラゴンは突撃してきた。

「うわっと！？」

ミナトはドラゴンの突撃を大きく上に跳んで避ける。

ドラゴンはそのまま壊れたビルに頭からぶつかりビルの崩壊に巻き込まれた。

「……うん……」

崩落したビルに飲み込まれたドラゴンを見ながらミナトは首を傾かしげ

た。

今のドラゴンは魔界では見たことのない種だった。

（新種かな……それともそもそもドラゴンじゃないのかな……）

「ミナトっちゃん」

考え込んでいるミナトに遠くから近づいてくる聞き覚えのある声の一つ。

「無事だったデスね。ミナトっちゃん！」

「デスコっ！」

現れたのはラスボスを目指して修行中の異形の少女。

人の手によって作られた人造悪魔。正式名称『最終兵器DESCO』だった。

「ミナトっちゃん。お姉さまや他の皆さんを知りませんか？」

「デスコも知らないの？」

ミナトの返答にデスコは肩を落とした。

「ということはミナトっちゃんも一人デスか……うう、お姉さま……」

「大丈夫だよデスコ。僕たちがこうして無事だったんだからみんな

もきつとどこかで僕たちを探しているよ」

「ミナトっちゃん……」

ミナトの励ましの言葉にデスコは少しだけ元気を取り戻す。

「そこまでだっ……!」

当然、空から聞き覚えのない少女の声が響き渡った。

「誰が少女だっ……!」

虚空に向かって叫び声を上げる少女。

「ちっ……! まあいいか…… そのてめえら、不法に次元転移を行った容疑が掛けられているんだ。一緒に来てもらっぜ」

機械仕掛けのゲートボールスティックの様な物をこちらに突き付ける赤い少女の命令口調にミナトはどう反応すればいいのか判断に困った。

「むっ…… ラスボスに戦いを挑むとはいい度胸デスね……」

対してデスコは臨戦態勢。

その様子を見た赤い少女も手に持ったゲートボールスティックの様な物を肩に乗せた。

「素直に従う気はねえ見てえだな……」

明らかな敵意のこもった視線にミナトはどうすれば穏便に済ませられるかを悩み始めた。

と。崩落したビルの中から瓦礫を押しつけてドラゴンが姿を現す。

「あつ。」

つという間にドラゴンは赤い少女を飲み込んだ。

.....

赤い少女を飲み込んだドラゴンは怒り狂った赤い瞳をこちらに向ける。

「こっ、怖いデスっっ!!」

デスコはミナトの後ろに隠れた。

どうやら先ほど強気だったのは相手の見た目が怖くなかったからのようだ。

そしてミナトは。

「.....見逃して、くれませんか？」

無駄とわかりきっていながらドラゴンに訊いてみるミナトの言葉を最後まで聞かずにドラゴンはミナトに体当たりを仕掛ける。

ミナトは溜め息をつきながら剣を取りだした。

戦いが、始まる

「デスコ。ラスボスを目指しているのならドラゴンごときで脅えちゃいけないよ?」

「だっ、大丈夫デス。誰もビビってなんていないデスっ!」

ミナトの後ろから出ようとしてもしないデスコの言葉にミナトは苦笑した。



第一話 次元転移しました。(後書き)

ヴィータ食われる。油断でもしていたのでしょうか……

次回、最初の戦いです。

## 第二話 幼女と戦闘に入りました。（前書き）

ドラゴンはすぐに終わりますが、題名通りあの幼女と戦います。

## 第二話 少女と戦闘に入りました。

瓦礫<sup>がれき</sup>を蹴散らしながら突撃してくる怒り狂ったドラゴン。

そしてミナトの後ろにはデスコがいる。

ならば。とミナトはデスコに声を掛ける。

「デスコ。魔チェンジ」

「はっ、はいデスっ！」

ミナトとデスコは一瞬のうちに大きくジャンプして空中でクロスした。

次の瞬間にはミナトの手には禍々<sup>まがまが</sup>しい形の二股<sup>ふたまた</sup>の剣が握られていた。

魔剣『デスコ』。

それは魔物型キャラが持つ特性『魔チェンジ』を使い、剣の姿となったデスコだった。

「行くぞ」

二股の刀身が左右に開き中から巨大な光の刀身が姿を現した。

ミナトはそれを水平に構えて。

「でえやっ！」

掛け声と共に思いつきり横に薙ぎ払った。

『魔剣バルムンク』

魔剣『デスコ』を用いた必殺技の一つだ。

光の刀身は驚くほどスムーズにドラゴンを切り裂き、悲鳴を上げることなくドラゴンは上下に体を分離させて絶命した。

その直後、光が消え開いていた刀身が再び閉じて行く。

この間わずか数秒程度の出来事だった。

切断された胴体から噴水のように血が吹き出る。

と、いきなり胴体の一部が動き出した。

「まさか……まだ生きているのかっ……!？」

警戒しつつデスコを構えなおすミナト。

だがその心配は杞憂きゆうに終わった。

うごめいていた胴体の一部が破裂し、中から血で真っ赤になった少女が姿を現したからだ。

「ふうーっ!! ふふうーっ!!」

真っ赤な少女はドラゴンとは比べ物にならないほどすさまじい眼力

でミナトを睨みつけていた。

だが暴君ヴァルバトーゼの元、数多くの悪魔、天使、魔神、魔王との戦いをくぐり抜けてきたミナトにとっては取るに足らない視線だった。

「てめえ……あたしをドラゴンに食わせてドラゴンごとあたしを切ろうとするなんて、随分とセコイまねしやがるじゃねえか……!!」  
ヴィータの大きな誤解にミナトは首を横に振った。

「違うよ。僕は」

「言いてえことがあるんなら牢獄の中で勝手に言っただなっ!!!!」  
その牢獄からここに來たんですけど。

ミナトの心の言葉など聞こえるはずもなく真っ赤な少女はゲートボールスティックを振りかぶってミナトに襲いかかる。

「……はあ。仕方ないな」

少女と戦うのは気が引けるミナトだったが、降りかかる火の粉は払わなければならない。

振り下ろされるゲートボールスティックをデスコで受け止める。

ぶつかり合う二つの魔力に周囲の瓦礫が吹き飛んだ。

「っ!?!」

罅<sup>つばせ</sup>迫り合いの最中<sup>さなか</sup>、少女はデスコに宿<sup>やど</sup>っている禍々<sup>まがまが</sup>しく強大な魔力を肌で感じ取っていた。

（こいつ……！？ 危険だっ……！！）

少女は先走ってここに来てしまった自分の迂闊<sup>うかつ</sup>さを呪った。

それと同時に、もうすぐここに来る仲間たちを危険にさらすわけにはいけないという強い思いが少女の中に生まれた。

少女はデスコをはじくと空を飛んでミナトから大きく距離を取った。

「アイゼンツ！！」

『ラケーテンフォーム』

少女の叫び声に呼応<sup>こたへ</sup>するかのよう<sup>からやっきよう</sup>にゲートボールスティックから音が発せられ、空蕨<sup>からやっきよう</sup>の様な物がゲートボールスティックから出て行くと同時にその形を変えていく。

ゲートボールスティックのハンマー部分の片方がスパイク、もう片方はロケットの推進機構へと変形した。

ミナトは知りえなかったことだが、それはゲートボールスティックもといグラーフアイゼン強襲形態『ラケーテンフォーム』。

射撃が行えなくなるなどの多少の欠点はあるものの、一対一の個人戦においては『打撃武器』として極めて高性能な形態だ。

「あたしの名はヴィータっ！ 『鉄槌の騎士』 ヴィータだっ！！」

赤い幼女

ヴィータは名乗り声を上げた。

「てめえの名はっ！」

問われたミナトは思わず苦笑した。

「てめえ……！！ なに笑っていやがるっ！！！」

「ごめん、ごめん」

ミナトには真っ直ぐで純真な幼い騎士を名乗る幼女の姿が滑稽こっけいであるように感じられた。

だがそれと同時に

「僕の名前はミナト・アサギリ。君みたいに二つ名を付けるなら、『暴君ほうくんの使い魔』とでも名乗ればいいのかな。」

「暴君っ……！？」

ヴィータは戦慄せんりつした。

使い魔。ということはこいつには主あるじがいる。

少なくともこいつほどの使い魔を呼びだせるということは相当な魔導師であることは容易に想像できる。

「ああ。それと一つだけ言って良いかな」

「ああっ！！　なんだっ！！」

考えているときに声を掛けられ、思わず凄みのある声を出したヴィータを意に介さずにミナトは先ほと思ったことをそのまま口に出す。

「僕は君みたいな娘は結構好きだよ」

「はあっ！？　なっ、なに言っただてめえっ！？」

ミナトの言葉に更に真っ赤になるヴィータ。

「もっ、もういいっ！！　考えるのはてめえをぶっ潰してからだっ！！」

ヴィータがアイゼンを大きく振りかぶる。

「ラケーテン……ハンマーッ！！！！」

叫びながらヴィータはアイゼンのロケット推進の力を借りて回転しながらミナトへ突撃していった。

ミナトは『魔剣バルムンク』でそれを迎え撃った。

再び二つの魔力が激突した。



「この魔力はっ……!？」

ぶつかり合う二つの強大な魔力を感じ取った少女たちは速度を上げてそこへ向かった。

## 第二話 幼女と戦闘に入りました。（後書き）

果たして次回で決着が着くでしょうか？

## オリジナル主人公設定（前書き）

とりあえず主人公の設定だけをご紹介します。

## オリジナル主人公設定

ミナト・アサギリ

年齢 不詳（外見年齢十五、六歳）

趣味、特技 家事全般、家事全般

容姿 年相応の背格好で自覚は無いが異性にモテる美少年。

髪の色 黒色

瞳の色 黒色

クラス 暴君の使い魔

得意武器 拳、剣、銃

固有技

プリニー連鎖爆撃

見習い？なのに先輩方を爆発させるのはやめましょう。

殺劇の舞い

美しい舞いですね。二重マルです。

ファミリアカタストロフ

暴君の使い魔を名乗るのならこれくらいできませんと。

汎用技

拳 砕破金剛掌まで習得。

剣 魔陣大次元断まで習得。

銃 コキユートスまで習得。

魔ビリティー

固有 ブラッドサーヴァント

効果 ヴァルバトーゼが共に戦闘に参加していた場合、全能力が二十パーセント増加。フーカが戦闘に参加していた場合は二十五パーセント増加。（二人ともいた場合、五十パーセント増加）

汎用 1、プリニー見習い？ 2、忘却の少年

効果 1、人間型キャラから受けるダメージを五十パーセント増加、魔物型キャラから受けるダメージを五十パーセント減少。（機械などは魔物型に分類する。ただし戦闘機人やクローンは人間型に分類する。）

2、通常攻撃及び特殊技に状態異常『忘却』（特殊技、魔法の使用不能）を付加。この効果は高確率で発動し、状態異常にならないボスキャラにも有効。なお、デバイスは武器、固有スキルや固有IS、（インヒューレントスキル）は魔ビリティーに分類される

ため使用可能。

特殊な魂の波長をしているため合ったプリニーの皮が無く、黒いプリニー帽をかぶることによって実体化している記憶の無い少年。覚えてるのは自分の名前だけだったので特に違和感なく地獄で生活していた。語尾に「っす」を付けないのは「自分はプリニー以下の半人前プリニーですからプリニー心得に従うのはまだ早いと思います。」とのこと。この言葉だけであのヴァルバトーゼを説得してみせた。

時期的には本編が終わってしばらく後くらいにヴァルバトーゼたちと出会った。

またフーカのこと異性として好きである。

しかし最初に会った時に「フーカ。」と呼び捨てにして、「初対面なのに呼び捨てするなっ！」と怒られて以降「風祭。」と呼んでいる。

ミナトにとっての仲間たちの位置づけは

ヴァルバトーゼ 尊敬すべき主かつ忠誠を誓った人。

フーカ 大好きな異性。

フェンリツヒ 仲間。

エミーゼル 兄弟子（ヴァル閣下に鍛えられた人として慕<sup>した</sup>っている。

）

デスコ （将来的な意味として）妹。

アルティナ 閣下の大切な人。

アクターレ アホ。

となっている。

そのためヴァルバトーゼに忠誠を誓っているが、優先順位はフーカ、ヴァルバトーゼ、アルティナ、デスコ、エミール、フェンリッヒ、（越えられない壁が二百三十枚ほど）アホターレとなっている。

三か月の間に家事全般が非常に得意となっており本人も楽しんでいる。

ちなみに多数の異性から好意を向けられるが本人はフーカー筋なので気付かない朴念仁な一面もある。

魔ビリティーはいつでも変更可能で、現在装備している魔ビリティーはブラッドサーヴァントと忘却の少年の二つである。

そして彼の携帯袋には多数の武器とお菓子、そしてヴァルバトーゼ用のイワシが詰め込まれている。

## オリジナル主人公設定（後書き）

こんな感じです。反則的な強さです。

レベルの方はあえて明確化しませんでした。

では本編の方はゆったりと行きたいと思いますので気長にお待ちください。



### 第三話 僕対ヴィータその二（前書き）

題名は適当なので気になさらないでください。

### 第三話 僕対ヴィータその二

ぶつかり合う二つの魔力。

「うらあああああ——————っ!」

ヴィータが渾身こんしんの力を込めて光の刀身を打ち砕こうとする。

その力に少しずつ後ろに下がらされるミナト。

(強い……っ!)

ミナトは見かけからは想像もつかないほど強力な力と魔力を持ったヴィータを心から賞賛した。

一方、ヴィータもミナトの力に驚愕きょうがくしていた

(まさかあたしの全力をあんな涼しい顔して受け止めるなんて……!)

ヴィータはミナトに脅威きょういと同時に何故か強い尊敬の念を抱いた。

(……こいつが犯罪者でなけりゃあ、はやてが部隊に誘ったかもな……)

もしくは自分がはやてに推薦すいせんしていたらどうか。

馬鹿な考えを振り切るかのようにヴィータは更に押し込むように魔力の出力を上昇させる。

「でやあああああ——————————っ！！」

「くっ！？」

とうとうヴィータの一撃に耐えきれなくなったミナトははじき飛ばされるように後方へ飛んで行きビルに激突し、その衝撃で崩れたビルの瓦礫がれきの中に飲み込まれた。

「……あつ」

ヴィータは呆けた表情でミナトが飲まれた瓦礫を見つめ、一瞬後に慌てた表情で焦りながら瓦礫に向かって飛んで行く。

「やつ、やべえっ！！ 犯罪者とはいえ死なせるわけにはいかねえ！！」

飛びながらヴィータはアイゼンを上段に構えてから振り下ろし、削さ岩機くがんきの様に瓦礫を破壊する。

だがヴィータはそんなことをする必要はないとすぐに悟さとることになった。

「っ！？ アイゼンッ！！」

『パンツァーシルト』

突き出されたヴィータの手の平から三角形の魔力の盾が生じる。

次の瞬間、とてつもない熱気を帯びた炎とそれと比例するかのよう  
に冷たい冷気を纏まとった吹雪が瓦礫を吹き飛ばした。

ヴィータの盾はその余波よはを防ぎきったが、直撃していたなら耐えら  
れたかどうかはわからなかった。

改めて戦慄せんりつするヴィータをよそに、瓦礫を吹き飛ばした際に生じた  
煙の中から二つの人影が姿を現す。

「助かったよ。ありがとうデスコ」

「いえいえ。これくらいどうってことないデスコよ」

そこにはミナトともう一人、先ほど見かけてどこかに消えてしまっ  
た変な格好の少女がいた。

そのかわりミナトの手にあつたはずの不気味な剣が消えている。

（どうなってやがるっ……！？）

魔チエンジのことを知らないヴィータが混乱するのは無理のないこ  
とだった。

「あつ。ミナトっちゃん。あの生意気な少女が睨みつけているデス  
よ」

そう言いながらデスコはミナトの後ろに身を隠した。

「デスコ。あの娘こはヴィータって名前がちゃんとあるんだから呼ば  
ないと」

「ヴィータっちゃんデスか。了解デスっ！」

「てめえらっ！！ ふざけてんのかっ！！！！」

「ひよわっ！？ 怖いデスっ！！」

いい加減しびれを切らしたヴィータの怒声どせいにデスコはミナトの背後で丸まって震え始めた。

「デスコ。さっきも言ったけどラスボスを目指すのならこれくらい  
のことでビビっていちゃ駄目だよ」

ミナトは優しくデスコに諭さとした。

「そっ、そうデスっ！ デスコはラスボスになるんデスからこんな  
ことでくじけちゃ駄目デスっ！」

デスコは再び臨戦態勢を取ると精一杯ヴィータを睨み返す。

「さっ、さあ来るデスっ！ お前なんかケチヨンケチヨンにやつ  
けてやるデスっ！」

強がるデスコをヴィータは静かに睨んでいた。

（…あの変なガキ……すっげえ魔力を感じる……）

怒りながらも冷静な分析を続けるヴィータには騎士としての確かな  
貫禄かんろくがあつた。

「ちょっと待って。デスコ」

ミナトは本当にちょっとずつヴィータに近づいて行くデスコを呼び止めた。

「なつ、なんデスカミナトっちゃんっ！ デスコはラスボスになるための修行として今からヴィータっちゃんと戦おうと」

「ごめんねデスコ。いまはヴィータとは僕が一对一で闘っているんだ。だから」

「ほえ？」

急に言葉を止めたミナトにデスコが見つめながら疑問の声を上げる。その時スローイングナイフが三本ほどミナトに向かって飛来して来た。

「うわあっ！ なんデスカっ！？」

驚くデスコを尻目にミナトは素手で三本とも受け止める。

それが狙いであることに気付かずに。

「おいミナトっ！！ 今すぐそいつを遠くへ投げ捨てろっ！！」

「っ！？」

ヴィータの言葉にミナトは瞬時に反応してナイフを遠くへと投げ飛ばす。

瞬間

ナイフが爆発した。

「……どういっつもりだ。ヴィータ。」

「……チンク……こいつはいまあたしと一対一で闘ってんだ。邪魔するんじゃねえ」

「……それはすまない。だが今は容疑者の確保が最優先だ」

「……ちっ」

その言葉に良い反論が思い浮かばず、しびしび納得するヴィータ。

そこに現れたのは眼帯を付けた灰色の髪の小さな幼女。

みんなの頼れる姉ことチンク・ナカジマだった。

「チンク姉っ！ 待ってくれよっ！！」

「置いてくなんて非道いっすよっ！」

更に現れる二人の少女。

ノーヴェ・ナカジマとウエンディ・ナカジマ。

個性にあふれた三人の戦闘機人が戦列に加わった。

「…………この世界は女性主流の社会なのかな…………？」

ヴィータたちを見て何となくそう思ったミナトであった。



### 第三話 僕対ヴィータその二（後書き）

ナンバーズ登場。

さて一対一を邪魔されたミナトはどうするでしょうか。

それと不定期ではありますが、亀にはならなさそうなのでキーワードから亀更新を排除しました。

第四話 じゃあね、バイバイ。(前書き)

逃げます。

#### 第四話　じゃあね、バイバイ。

「よし。それじゃあ逃げようかデスコ」

「ええっ！？　ミナトっちゃんっ！！　突然何を言い出すんデスコっ！！」

ミナトの提案にデスコは驚きの声を上げた。

ミナトはデスコの言葉に返答せずに静かにヴィータたちを観察する。

「へへえんっ！！　さてはあたしらの登場に恐れをなしたっスねっ！！」

何もしていないウエンディの言葉はツッコミすら入れてもらえなかった。

「ちよっ！？　みんな非道いつスっ！　何か言ってほしいっスっ！！」

「うるせえっ！　静かにしてやがれっ！」

「ノーヴェーっ！　もうちよつと優しくツッコんでほしいっスよっっ！」

漫才を始めるノーヴェとウエンディを無視してヴィータとチンクは油断なくミナトとデスコの挙動きょどうを観察していた。

（ヴィータ。彼らはどのような戦い方をしていた？）

（ガキの方はわからねえがあいつは変な形の剣を使ってやがった。  
あれがあいつのデバイスだと考えると魔導騎士タイプに間違いねえ。  
それもかなりの使い手だ）

念話を飛ばして会話をするヴィータとチンク。

（だがデバイスが剣だというだけでは魔導騎士とは限らないだろう  
？）

（確かに。だが普通の魔導師があたしの全力の一撃を受け止めら  
れるなんて考えられねえ）

（受け止めたっ！？ ラケーテンフォームの一撃をかつ！？）

チンクの顔が！<sup>きょうがく</sup>驚愕の色へ変わった。

（とにかく。あいつもあのガキも油断できねえ相手だ。気を抜くん  
じゃねえぞ。チンク）

（ああ。お前の全力を受け止めた相手となれば油断なんてできるは  
ずが無い）

警戒心を更に強めるヴィータたちをじつくりと眺めていたミナトが  
口を開く。

「……考えてみたんだけどね」

ヴィータとチンクの警戒心が強まる。

「この場で彼女たちと戦う理由が僕たちには無いって思ったんだ」

（それに一對一の闘いに水を差されちゃったし）

ミナトは内心で残念そうな溜め息をついていると、隣にいたデスコが反論する。

「でっ、でもラスボスは逃げられないデスよっ!!」

「大丈夫だよデスコ。確かにラスボスからは逃げられないけど、ラスボスは逃げていいんだから」

間髪いれずに返された言葉に。

「なるほどデス。ラスボスは逃げても良いんデスね。メモメモ……」

納得しながらメモを取り始めた。

苦笑しながらその姿を眺めていたミナトは改めてヴィータたちを見る。  
やる。

「それじゃあヴィータと……ええっとそっちの人は」

「……チンクだ。チンク・ナカジマ」

名乗るべきかどうか数瞬考えたチンクだったが、ヴィータの名前を知っているとヴィータは名乗ったということなので自分も名乗ることにした。

「チンクさんですね。僕たちはこれからはぐれた仲間たちを探しに行かなければなりませんから、これでお別れです」

ミナトの言葉を最後まで聞かずにヴィータがミナトへとロケット噴射を利用した回転をしながら高速で突撃する。

「逃がすと思つてんのかああああーーーーーっ！  
！！」

先ほどと同じすさまじい破碎の一撃にミナトは。

「逃げますよ」

携帯袋から取り出した銃をヴィータへ向けた。

「っ！？」

驚くヴィータとチンクを尻目に銃を構えたままミナトは後ろに大きく跳躍した。

「逃がすかよっ！」

回転しながらヴィータは軌道を変えてミナトへと追撃する。

「残念」

ミナトが引き金を引くと明らかに銃そのものよりも大きな機械が飛び出した。

「んだとっ！？」

ヴィータとミナトの間に現れた機械にヴィータは軌道を変えることが間に合わず機械に全力の一撃を叩き込んだ瞬間

中に内蔵されていた誘導弾が爆発した。

「ヴィータッ!?」

大きな煙が周囲を覆い尽くしている中、チンクは爆発に飲まれたヴィータの元へ向かう。

（まさか質量兵器を隠し持っていたとはっ……!?!）

予想もしていなかったことにチンクは戸惑いながらもヴィータを捜索し続ける。

「ヴィータッ!! どこだっ!! 返事をしろっ!!」

声を張り上げるも一向に返事が無い。

やがて徐々に煙が晴れていくと

「……………」

一点を見つめたままボロボロになったヴィータが浮いていた。

「ヴィータッ! 大丈夫かっ!」

「……………ああ」

服があちこち焼け焦げ、肌も火傷と出血をし、機械を破壊したアイゼンと両腕もボロボロだったがそれでもヴィータは一点を見つめたまま動かない。

「……どうした？」

「……あの野郎……あたしのことなんて眼中にありやしなかったっ……！！」

全力で闘った自分に対して相手はそもそも自分を見てすらいなかった。

実際にはミナトは確かに全力を尽くしていなかったが、手を抜いていたわけではないしヴィータのことを強い娘だと認めていた。

それでもそう感じたヴィータは憤怒の形相でミナトがデスコを引張って逃げに行った一点を睨み続ける。

「……絶対にあたしの手でぶっ倒してやるっ……！！」

ヴィータが何故ここまで怒っているのかがチンクにはわからなかった。

だが実はヴィータ自身も何故これほど怒りを感じているのかがわからずに戸惑っている自分があることを自覚していた。



「だから違っって言っでんだろっ!!」

「そっいつ問題じゃ無いっスっ!!」

ちなみにこの二人はずっと漫才を繰り広げており、後でチンクにこ  
つてりしぼられたのは言うまでもないことだった……

#### 第四話　じゃあね、バイバイ。（後書き）

あの時、ミナトが使ったのは銃の汎用技の一つである『クラスターランチャー』という技です。

第五話 女の人しかいないのかな？（前書き）

ヴィータたちから無事に逃走できた様です。

## 第五話 女の人しかいないのかな？

「ミナトっちゃん。これからどうするデスか？」

ヴィータたちから全力疾走で逃げてきたミナトたちは廃墟から遠く離れた森の中を歩いていた。

その森はそれほど深くは無く、日の光が良く届くも涼しさをを感じさせる森だった。

「ん〜……そうだね、やっぱりヴァル閣下や風祭たちを探そうか」

「でも……みんなどこにいるのかもわからないんデスよ？」

「そうなんだよね〜……ほんとどうしようか……」

ミナトが歩きながら悩み始めると、腹の虫が鳴った。

「…………おなかすいたデス」

ただしデスコの。

「う〜ん……困ったな……食料は持ってきてないし……」

携帯袋（お菓子とイワシ入り）を見ながらつぶやくミナト。

と、ミナトは人の気配を感じ取った。

「ちょっと待っててねデスコ。誰かいるみたいだからちょっと食料

をわけてくれないか訊いてくるよ」

「はいデス。期待してるデスよ。ミナトっちゃんっ！」

ミナトはデスコの声援に苦笑しながら森の中を進む。

しばらく進むと川が流れていた。

とてもきれいで澄みきった川で水遊びをしている複数の人影があった。

ミナトは気配を消しながら隠れて様子をうかがった。

「あははっ！ ヴィヴィオ。食らえっ！」

「わあっ！？ やったなっ！ お返しだよりオっ！」

「わぷっ！？ くそっ！ もう一回だっ！」

可愛い水着姿で水を掛け合う活発そうな二人の少女と笑いながらそれを見つめる大人しそうな少女。

「ヴィヴィオっ！ そろそろお昼だよっ！」

「早くしないとこの馬鹿スバルが全部食べちゃうわよっ！」

「ふへへふわふははっ！」

バーベキューをやっているらしい母親らしきサイドポニーの女性や付きそいらしきロングヘアーの女性とその他にも複数の女性の姿が。

ちなみに全員水着姿。

小屋がいくつかあるところを見ると、キャンプ場か何かであろうことがわかった。

（もしかしてこの世界って女性主流どころか女性しかないのかな……？）

今のところ女性にしか会っていないミナトはそう思った。

「はーいっ！ わぶうっ！」

「あははははっ！ 油断大敵だよっ！ ヴィヴィオっ！」

再び水の掛け合いを始める二人の少女。

大人しそうな少女は苦笑しながらも大人しくサイドポニーの女性の元へ。

「ヴィヴィオっ！ 早くしないと本当にスバルが全部食べちゃうよっ！」

「あっ、ちょっと待ってなのはママっ！ リオっ！ 勝負はお願いだよっ！」

「わかったっ！ また後でやろうねっ！」

二人の少女が急いでサイドポニーの女性の元へ向かっていく。

「ヴィータさんたちも来てほしかったですね」

「仕方ないよ。休暇の日程が合わせられたのは私たちだけなんだから」

完全にオフになっている彼女たちはヴィータたちが遠くの廃墟にいることを知らない。

ヴィータたちも旅行に行くとは聞いていたが、彼女たちの行き先までは聞いていなかった。

（さて……どうしようかな。）

ミナトは隠れながら思考を巡<sup>めく</sup>らす。

（このまま出ていけばのぞき魔扱いされそうだな……デスコには悪いけど、誰もいなかったってことで済ませよう）

ミナトは音を立てないように静かに去っていく。

だがそれを許さないのがこの世の掟。

『マスター』

「どうしたの？ レイジンググハート？」

『あの木の向こう側に誰かいます』

「えっ！？」

驚きの声を上げながらミナトがいる方向に視線を向ける女性たち。

(……やっぱり、のぞきはばれる運命なのかな……)

心の中で反省と溜め息をつくミナトは森の中を駆け出した。

「みんなっ!! のぞき魔を捕まえるよっ!!」

「「「はいっ!!」」」

返事の数は一人居たがミナトは先ほど確認したときはもっと多かった。

ミナトは全力でデスコの元へと駆け出し、すぐにデスコの元へ戻ったのだが。

「ええつと……それで君はいつたい……」

「だからデスコはラスボスなのデスっ! パパが造ってくれたんデスっ!」

「……造った? 君はまさか……」

デスコの元には一人困り顔をした同い年くらいの男物の水着の上に白いパーカーを着た赤毛の少年がいた。

(ちゃんと男もいたんだ)

少しだけ安心したミナトは追われているという事実を思い出し二人の会話を割って入る。



「デスコ。早くここを離れるよ」

いきなり現れたミナトにデスコも赤毛の少年も驚愕きょうがくの表情を浮かべる。

「ミナトっちゃんっ！ そんなに急いでどうしたデスコっ!？」

「……君がこの子の保護者なの？ ちょっと詳しい話を聞かせてほしいんだけど」

「そんなことより今は早くここから」

「見つけた」

ミナトが言葉を言い終わる前にミナトの頬を魔力弾がかすめる。

「のぞき魔くん。ちょっと頭、冷やそうか」

背後から感じる強大な魔力にデスコは脅えていた。

ミナトは作り笑顔を浮かべて口八丁でどうにか誤魔化すために振り向

「待ってください。なのはさん」

こうとしたミナトを手で制しながら赤毛の少年が口を開いた。

「エリオ？ どうしたのかな？」

「この二人は今日ここに招待した僕の友人です。先ほどようやく来たのでここで話をしていました」

「なのはさんっ！ のぞき魔はっ！！」

他の女性たちも集まってきた。

「皆さん。実は」

赤毛の少年が堂々とした態度で嘘を並べる。

女性たちは納得していない顔をしながらも反論の声を上げる者はいなかった。

（……助かった、のかな？）

ミナトはなぜ少年が自分をかばったのかわからなかったが、とりあえず安堵しておくことにした。

「……後でいろいろ聞かせてもらっつよ」

誰にも悟られない様に小声で言ってきた赤毛の少年にミナトは小さく頷いた。

## 第五話 女の人しかいないのかな？（後書き）

ミナトはフーカ一筋ですので、水着美女などでは興奮しません。

それとエリオですが、ぶっちゃけ性格が原形を留めていませんのでご了承ください。

**第六話　ただいま情報交換中です。（前書き）**

えーっと、エリオ君の性格は原形を留めておりません。

中身は完全にオリジナルキャラと化しておりますのでその辺りのことはご了承ください。

## 第六話　ただいま情報交換中です。

「…………なるほど」

簡単な自己紹介を済ませた後、ミナトとデスコはエリオに連れられて防音機能の備わった小屋の中でこれまでの事情を説明した。

なのはたちも話を聞こうとしたがエリオの説得によってしぶしぶ外で待機することとなった。

「人に造られた最終兵器。死人の使い魔。暴君と呼ばれた魔王…………」

エリオはいま聞かされたことのキーワードを口に出して言った。

「突拍子とつぽうしもない話だからね。信じられないのは無理もないよ」

「でもデスコたちは嘘なんかついてないデスっ!!」

ミナトとデスコの言葉にエリオは頷うなずいた。

「それでも人を見る目はそれなりにあるつもりだからね。君たちが嘘を言っていないことぐらいはわかるよ、それに僕の中にいるアイツも君たちは嘘を言っていないって言ってるしね」

(…………アイツ?)

ミナトはエリオの言葉に疑問を抱いたが口には出さなかった。

「信じてくれるんデスっ!　ありがとうデスっ!　エリオっちさ

んっ！」

「え、エリオっち……」

デスクにそう呼ばれたエリオは多少引きつった笑みを浮かべた。

「それでエリオ。この世界のことについて教えてほしいんだけど」

「そうだね。君たちも知っておいた方が良さそうだ」

エリオはミッドのことや管理局のことをミナトたちに説明した。

「……おかしいよね。それ」

説明を聞き終えたミナトが最初に発した言葉がそれだった。

「特にそのデバイスとかいう武器についている非殺傷設定だけ？  
そんなものつける必要性は皆無だと思っただけど」

「そうデスっ！ 戦いには犠牲がつきものだってヴァルっちさんやお姉さまが言ってたデスっ！」

二人の怒りがにじみ出ている言葉を聞きながらエリオは苦笑した。

「そうだね。戦いには必ずリスクが必要だ。正直、僕も非殺傷設定なんて必要ないと思うよ」

「それじゃあエリオっちさんはデバイスを持ってないんデスカ？」

デスクの質問にエリオは自分の腕時計を見せた。

「これが僕のデバイス。だけど非殺傷設定は取り外してあるんだ」

「？ そんなことして大丈夫なのか？ 管理局のルールじゃ非殺傷設定は必ずつけるものだって」

「うん。完全な違法デバイスだよ」

エリオは笑いながら言った。

「そつ、そんなことして大丈夫なんデスかつ！？」

「……このデバイスは僕の覚悟の証でもあるんだ」

エリオは過去を思い出すように空中に視線を移した。

「覚悟？ いったいどんな覚悟を決めているんだ？」

「……勝ちたい奴がいる」

ミナトの問いにエリオの目が鋭くなった。

「ひえっ！？」

デスコは鋭くなったエリオの視線を防ぐようにミナトの後ろに隠れる。

「初めてあいつと闘った時、今まで感じたことのない高揚感（こっぴようかん）に包まれたんだ。師匠に鍛えられていた時でも感じなかった楽しさ。もう何度闘い続けたのかもわからないけど、僕は今も闘い続けている」

エリオは鋭さの中に親しみと憧れ、そして若干の嫉妬の混じった複雑な目で遠くを見つめる。

「最初は僕の力について知らなかったストラーダが破壊されて僕の負けに終わった。次に闘った時はストラーダを強化改造して僕の力について行けるように強化したから僕が勝った。だけどその次会った時はあいつは更に強くなって僕が負けた」

エリオは子供のように実に楽しそうに延々と勝敗について話し続けた。

（宿命のライバルってところかな）

ミナトはそういう相手がいるエリオのことを少し羨ましく思った。

「それで次会った時は今度こそ決着をつけようって言ったんだ」

「ふわぁ……すごいんデスね……」

エリオの話を聞き入っていたデスコが感動の息を漏らした。

「もつとも、もう何回目の約束になったのかは覚えていないけどね」  
一気に話して疲れたのか、苦笑した後エリオは深呼吸して息を整えた。

「デスコもっ！ 宿命のライバルである勇者さんと早く会いたいデスっ！」



「それならヴィータたちの中から選んでみたらどうかな」

「えっ？」

微笑みながら言ったミナトの言葉にエリオが反応する。

「？ どうしたんデスカ？ エリオっちゃん」

「ヴィータって……見た目は赤い服を着た女の子のことかな？」

（そつえばこのことは話していなかったっけ）

ミナトはここに来る前に会ったヴィータたちについて話した。

「ヴィータさんたちを退けるなんて、君たち本当に強いんだね」

「いやいや、それほどでもデス」

褒められたデスコは照れながら笑った。

「でもヴィータさんは」

と、エリオが何かを言いかけた時、扉を叩く音がした。

「……話しはここまでみたいだね。とりあえずみんなと話すときは僕が言ったこととちゃんと口裏を合わせてね」

「わかったデスっ！」

「うん。大丈夫だ」

エリオは一回額うなずいてから入口近くに立つと扉を開けた。

「…………エリオ……………」

川の近くでフェイトが一人黄昏たそがれていた。

「…………いつになったらお母さんって呼んでくれるのかな……………」

それはフェイトにとっては一番重大な悩みだった。

**第六話　ただいま情報交換中です。（後書き）**

フェイトは親バカ設定です。

では今後も話の内容共々のんびりと進んで行きます。

第七話 やっぱり森林浴は良いね。(前書き)

エリオがいろいろと訊かれ、ミナトは歩きます。

ただ、それだけです。

## 第七話 やっぱり森林浴は良いね。

エリオはなのはたちにミナトたちを紹介した。

だがどこの出身などの過去の経歴については一切を語らなかった。

（本当のことを言っても信じてもらえないだろうし、管理局に余計な情報を与えたくないしね。）

無論、エリオの中には信頼している人たちへ本当のことを言わないことによる良心の呵責<sup>かじやく</sup>はあった。

だが

（それはそれ。これはこれ）

といった感じでエリオは幼いころとはかけ離れた考え方をするようになってしまった。

エリオの話をなのはやティアナは疑念を抱いたものの証拠が無いので沈黙したままだった。

「皆さん。よろしくお願いします」

「よろしくデスっ！」

それにミナトはおかしななぶり物をしている点以外は普通の少年に見えたこと、デスコは不気味な格好をしていたが話し方や雰囲気<sup>ふくいき</sup>が幼い少女であったことも手伝ってすぐにその場に打ち解けることが

できた。

わずかに疑念を残したまま、ミナトとデスコを入れてバーベキューが再開された。

「デスコ。遊ぼうっ!」

「はいデスコっ!」

食後、デスコはヴィヴィオたちと一緒に川へと向かった。

その様子を眺めていたミナトの耳にエリオとなのはたちの話し声が届いた。

「ねえエリオ。あの子たち本当にエリオの友達なの?」

「はい。そうですけど」

「……それじゃあいつ、どこで、どんなふうに会ったのよ」

「ティアナさんは生まれてから今までの全ての友人との出会いについて鮮明に語れますか?」

「……う……ぐっ……そっ、それとこれとは話が違っでしょう!」

「違いますよ」

「エリオ……私にも話せないことなの……?」

「……フェイトさんは僕のことを信じてくれないんですね……」

「っ！？ そっ、そんなことないよっ！！ 私はエリオを信じてるよっ！！ うんっ！！ エリオは正しいっ！！」

「いやいやいやっ！！ フェイトさんどれだけエリオに甘いんですかっ！！！」

「ありがとうございます。フェイトさん。なんだか本当のお母さんみたいです」

「……はうっ！！！」

「フェ、フェイトちゃんっ！！ どうしていきなり鼻血をつ！？」

「ねえねえエリオ。まだ材料が余っているから早食い勝負しようよ」

「わかりました、受けて立ちますよ。スバルさん」

「馬鹿スバルっ！！ 今は大人しく黙ってなさいっ！！！」

ミナトはそこで聞き耳を立てるのをやめた。

(……思っていた以上にエリオはしたたかだったんだな)

ミナトは改めてエリオが敵にならなくて良かったと確信していた。

「さて。僕は僕で閣下や風祭たちの情報を集めないとな」

手がかりは皆無だったがこのままジッとしていても退屈なだけだっ

たため、ミナトは立ち上がりエリオに一声かけてから森の中へと入って行った。

「……………」

森の中を探索中にミナトは後ろを振り返った。

誰もいないし何もない。

ミナトは前を向くと再び歩き始めた。

（……気付かれてはいないみたいね）

（ティア）。やっぱりやめようよ）

（馬鹿スバルっ！ エリオの話は明らかにおかしいわっ！ もしかしたらエリオは彼に脅されているのかもしれないわよっ！）

（でも……………）

ミナトの背後にはスバルとティアナがいた。

『オプティックハイド』

術者と術者に接触している対象を不可視の状態にする幻術魔法の一つ。

あの後、エリオと話していたティアナは一人森に向かうミナトを見



てティアナはあとをつけることを決意。

適当にエリオとの話からスバルと共に抜けだしてこの魔法を使い尾行していたのだ。

エリオは去っていくティアナたちに何も言わなかった。

「……………」

ミナトは上を見上げた後、右に方向転換して足を進める。

その後ろに物音を立てない様に静かに慎重についていく二人。

しばらく歩くとまた方向転換。

そしてまた。

(…ティア…もしかして尾行がバレてるんじゃないかな…)

(……私もそう思えてきたけど、それなら話しかけるか逃げるかするはずよ。もしかしたら念のために遠回りしているだけかもしれない……)

そしてまたしばらく歩くと。

「お帰り、散歩はどうだった？」

「ただいま。思ったよりも森林浴が楽しめたよ」

元のキャンプ場に辿り着いた。

「まぎらわしいのよおおおおお――――」  
「―――っ!―――!」

エリオとミナトの会話にティアナは全力でツッコんだ。

「? あの娘、どうしたの?」

「さあ?」

突然、森の中から姿を現して絶叫したティアナをミナトとエリオは不思議そうに見ていた。

第七話 やっぱり森林浴は良いね。(後書き)

次は旅行が終わった後から始まります。

## 第八話 寮生活の始まり。(前書き)

とりあえずミナトとデスコはエリオの住んでいる寮に行くことになったようです。

## 第八話 寮生活の始まり。

楽しい旅行から帰ってきた次の日。（ティアナがやけにぐったりと  
していたが）

朝日が顔を出すのとはほぼ同時に起きたエリオは早朝訓練に励んでいた。

どれだけの力があるうともそれに振り回されているようでは一人前  
とは呼べない。

そのためにエリオは日夜努力を惜しまずに自分を高めている。

「……………ふう」

七時になったことをこれまでの経験から判断したエリオはタオルで  
汗を拭いてから寮の自室へと戻って行く。

ついでに昨日、住む場所も当てもないので自室に泊めたミナトを起  
こそうと（デスコは隣人に任せた）考えていたエリオの足が止まっ  
た。

「……………なにこれ」

誰にも向けられていないつぶやきはエリオ自身以外には届くことは  
無かった。

その光景を簡単に言ってしまうばきれいすぎる寮だった。

窓も床も壁も。

至るところが鏡のように磨きあげられ太陽光を反射していた。

まさかと思い自室に戻ったエリオはミナトの寝ていた布団が丁寧に畳まれているのを見て確信した。

「エリオ……？　どうかしたのか？」

その時、乱れたパジャマ姿の無防備な隣人が眠そうにしながら扉から顔を見せた。

「ああ、おはようセツテ」

「おはよう……」

セツテも寮の異変に気づいたらしく寝ぼけ眼まなこを見開いて周囲を見回した。

「……これはいったい………？」

「見当はついてるけどね」

訝いぶかしるセツテに背を向けてエリオは寮の食堂へ向かって歩き始めた。

「エリオ………？」

「おいでよセツテ。たぶん寮を掃除したのは彼だからさ」

振り向かずと言ったエリオの言葉にセツテは無言で頷き、エリオと

共に食堂へおもむく。

二人が食堂に近づくに連れて良い匂いが漂ってきた。

この寮では完全な自給自足性になっており料理を行う人はセツテがエリオと食事を共にするときに使用するくらいのものであったので、これは異常な事態と言えた。

「このみそ汁の匂いは……………」

「食欲をそそる匂いだね」

何故か警戒するセツテと軽口をたたくエリオ。

二人は食堂の扉を開け放ち、調理場へと足を運ぶとそこにいたのは

「あつ、おはようエリオ。もうすぐ朝食の準備が終わるからちよつと待っててね」

エリオが予想した通り、黒いプリニー帽をかぶっている少年が朝食を作っていた。

が

「……………なに、その格好」

呆然としながらつぶやくエリオに、割烹着を着たミナトが疑問の声を上げる。

「えっ？ 似合っていないかな……？ 僕はいつも奉仕するときにはこの格好で行うんだけど……」

問われて返答に困ったのはエリオの方だった。

「……似合っていないわけじゃないけど……」

割烹着を着て朝食を作るミナトはエリオの目から見ても絵になっていた。

（だけどなんかおかしい様な気が……）

確証を持っていたわけではないため、エリオはその違和感を直接口に出しはしなかった。

と、会話に参加していなかったセツテが敵意と共にエリオの前に進み出た。

「セツテ

」

「おい、お前」

エリオの呼びかけを無視してセツテは鋭い眼差しでミナトを睨みつける。

「んっ？ どうかしましたか？ えーっと……」

「セツテだ。そんなことよりもお前、今すぐエリオの朝食を作るのをやめろ」



その一言はミナトとエリオに困惑の沈黙をもたらした。

朝食を作るのをやめろ。だったなら二人も意味はわからなくてもなんとなく理解できた様な気分にはなれただろう。

だがそこにエリオの、が付いたことによってミナトは（何かの嫌がらせかな？）と思い、エリオは（最近セツテを怒らせるようなことしたかな……？）と思索した。

「エリオの食事は私が作る、朝だろうが昼だろうが夜だろうが。これは誰にも譲らない」

「ああ、なるほど」

続いたセツテの言葉にミナトは納得の色を示した。

「そういうことなら一緒に作りませんか？ 僕は他の方の朝食を作りますからセツテさんはエリオの朝食を作ってあげてください」

「わかった、それならいい」

言うが早いがセツテはどこから取り出したマイエプロンを装着してミナト共に調理を開始した。

「……うーん……」

ちなみにエリオは二人が料理を行っている最中にも過去を振り返っていた。

「一体何で怒っているんだろう……？ チンクに自作のストラーダ

型腕時計を渡したことかな……？ それともノーヴエにネックレスを作ったあげたこと……？ はたまたルーに手作りのイヤリングをあげたからかな……？ でも全部セツテは知っているはずだし……それとも  
「

（思っていた以上にセツテさんは心が広いんだね……）

エリオの発言とセツテの心の広さに驚愕しつつミナトは朝食を作り続けた。

「まったくなんなんだよおっ！」

見知らぬ悪魔に突如強襲された一人の少年は魔法でそれらを撃退した。

その直後、飛来してきた謎の人間たちがわけのわからない口上を述べて襲いかかってきたのだ。

特に先頭にいたポニーテールの炎の女剣士の剣幕に漏らしてしまいそうになった。

「時空管理局だかなんだか知らないが、なんでボクがこんな目に……」

逃亡する少年の額にはトレードマークであるドクロが輝いていた。

## 第八話 寮生活の始まり。(後書き)

次回は烈火の将(剣精付き)VSドクロ坊ちゃんの予定です。

## 第九話 エミールVSシグナム そのいち（前書き）

エミールとシグナムの闘いの始まりです。

## 第九話 エミーゼルVSシグナム そのいち

光輝く太陽の元、明るい森の中をこそそと動き回る緑色の影が一つ。

「はあゝ……なんでボクがこんな目に……」

何度目かわからない溜め息をつきながら足取り重く歩いている少年。

元魔界大統領の息子にして自分の意志で父親を越えようとする死神。

エミーゼルだった。

「おゝい、ヴァルバトーゼゝ、フェンリツヒゝ、フーカゝ、デスクゝ、アルティナゝ、ミナトゝ、みんなどこに行っちゃったんだよゝ」

先ほど大きな声で探しまわった結果、管理局に見つかってしまったため（実際はその大きな魔力を感知されたことによって見つかったのだが）ささやく様な小さな声で呼びかける。

「ちくしょゝ……ボクが一体何をしたって言うんだよゝ……」

自分一人しかいない上に追い回されているからか、いつも以上に気弱になってしまっているエミーゼル。

精神的な疲れから足を止めて見覚えのない景色を見回す。

その行動のおかげで上空から飛来する火炎弾が命中しなかった。

「うひゃあっ!？」

だが、突如<sup>とつじょ</sup>目の前に炎の塊が落ちてきたのを見てエミールはその場に尻もちをついてしまった。

「ちっ！ 外したかつ！」

「先走り過ぎだぞ、アギト」

先ほど聞いたばかりの聞き覚えのある声にエミールは全身を震わせながら振り向く。

「でっ、出たああああー——————」

そこにはエミールの予想した通りポニータールの炎を纏った剣士  
烈火の将シグナムと相棒である烈火の剣精アギトの姿があった。

「貴様にいくつか訊きたいことがある」

怯<sup>おび</sup>えているエミールの様子などお構いなしに（あるいは単に怯えていることに気付いていないだけか）シグナムは命令口調で質問を開始する。

「何の目的でこの世界に転移してきた、正直に答えろ」

「いつ、一体何のことだよおっ！」

震えながら問い返すエミールにシグナムは冷笑で応じる。

「ふっ、怖がつているふりをしたところでその体から出る強大な魔力を隠しきれものではないぞ」

本気でビクッているエミーゼルをシグナムは自分に都合の良い様に解釈する。

だが一概に<sup>いちがい</sup>シグナムを責めることはできない。

事実、エミーゼルは強大な魔力を持っている上に数々の死闘をくぐり抜け、気弱だが立派な悪魔へと成長した。

そのため怯えながらも体は本人の意思とは無関係に臨戦態勢を取ってしまい、それゆえにシグナムは怯えた振りだと判断した。

「話すつもりが無いのなら……拘束した後にゆっくりと話を聞かせてもらおうっ！」

シグナムはレヴァンティンを構え、エミーゼルへと空を疾走する。

「うひゃあわあっ！ くっ、来るなあっ！ー！」

エミーゼルは持っていた杖をシグナムへと向ける。

瞬間、杖に魔力が集中し炎が噴き出た。

「なにっ！？」

エミーゼルが自分と同じ炎使い（だとシグナムは思った）とは思ってもみなかったシグナムは驚愕するが





店長、と書かれた帽子をかぶった瞳に炎を宿した巨人の手の平から生じた炎がシグナムを飲み込み

「くっ」

「シグナムッ!？」

そのまま森の一部を炭化させた。

一瞬で広範囲の木々を炭化させた炎は、熱血店長の燃える闘魂とっこんの証と言えよう。

やがて熱血店長が消えるとそこには灰となった森とエミール、そして

「……危ないところだった」

先ほどまでとはまったく違う姿のシグナムだけが残された。

「……ん」

エリオから渡されたお金で夕飯の買い出しに来ていたミナトは品物の値段と質を見比べていた。

字は読めないが幸いなことに数字は変わらないので値段はわかる。

後は経験と直感でどう買い物するのが一番安く済ませられるかを考えるだけ。

もちろん栄養のバランスとおいしさも考えて献立こんだてを作らなければならぬ。

「……やっぱり今日はサラダ中心が良いかな……」

完全に順応しているミナトがエミールエミールの危機に気が付くはずもなかった……

## 第九話 エミールVSシグナム そのいち（後書き）

シャレにならない威力を誇るエミールの魔法。

次回はどのようなでしょうか……

## 第十話 シゲナムVSエミールその二（前書き）

両者互角？ の戦いです。

## 第十話 シグナムVSエミールその二

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息を荒くしているエミールは別の意味で焦っていた。

恐怖に駆られて森の一部を焦土にし、襲ってきた相手を灰にしてしまった。

冷静に考えれば襲ってきた相手を捕まえていろいろな話を聞いた方が仲間たちの居場所がわかったはずなのに。

「うう……ボクってやっぱりまだまだ……」

頭を抱えて自己嫌悪に陥るエミール。

「まさかこれほどの魔力を持っていたとはな……」

「え……………っ!？」

空から届いた声にエミールは上を見上げた。

そこには髪の色が変わり炎の翼を生やしたシグナムがいた。

「お前がもし冷静に狙いを定めていたならば、今の一撃で私は燃え尽きていただろう」

『だから今度はあたしらも全力で行かせてもらっぜ』

「えっ？ えっ！？ なんだそれっ！？ 魔チエンジンなのかっ！？  
それとも怒ツキングっ！？」

初めて見るユニゾンに慌てふためくエミール。

「行くぞ、アギト」

『おうつ！』

だがシグナムはそれを油断を誘うための道化芝居と判断し、左手に  
炎の剣を纏わせて振りかぶる。

「剣閃烈火っ！」

炎はその猛り<sup>たけ</sup>を増していき空間を焼き切る刃と化す。

『火龍一閃っ！』

シグナムの動きに合わせたアギトの叫び。

振るわれた左手より発する炎がその空間の全ての敵を薙ぎ払い<sup>せんめつ</sup>殲滅  
する。

非殺傷、といえど手加減なしの一撃を食らえばエミールも意識を  
保つことは不可能。

もっとも、非殺傷設定など知らないエミールにとってその炎の刃  
は死<sup>こわ</sup>へ誘<sup>いよ</sup>つ一撃にしか見えない。

エミールはその一撃を食らうまでの間に走馬灯が走っていた。

父親の威厳を盾に好き勝手やっていた日々。

自分自身の力で歩いて行くことを決めた時。

初めて魂を刈り取った瞬間。

アクターレ（＝アホ）を魔界大統領の座から引きずり降ろし黒歴史として永久に封印すること。

（そうだ、ボクはこんなところで死ぬわけにはいかないんだっ！）

炎の刃はもう目前まで来ていた。

一瞬の間に駆け巡った思い。

その全てを訳もわからないこんな世界で無駄にすること。

それだけは

「絶対に認めるもんかああああ——————————つ  
！！！！」

「っ！」

叫ぶエミールゼルの姿が黒い何かに包まれたかと思うとその姿が変化した。

否、変化と言うほど生ぬるいものではなくまったく別の存在となった。



道化師の様にも見える絶大な魔力を持った巨大な死神。

シグナムの最強の一撃を回転する巨大な鎌で受け止め、拮抗した力で耐えている。

「面白いつ！」

その異形の姿を見てシグナムは恐怖するどころか喜びに満ち溢れた顔をしていた。

周りからバトルマニアと言われようともシグナムにとって強敵と戦うことは至高の快樂。

例え相手が異形の怪物であろうともそれは変わらない。

「はあああああつー！」

左手に力を集中する。

例え力が拮抗していようととも気迫でそれを打ち破って見せる。

単純すぎる精神論だったが徐々にエミールが押され始めた。

（いけるっ！）

『いけるぜっ！』

シグナムとアギトが勝利のために更なる力を込めた時。

エミールの方前に三色の魔法陣が展開され、炎、氷、風の三属性の荒れ狂う魔法の渦がシグナムを飲みこまんと向かってきた。

普通ならば誰もが逃げ出す。

この状況下では相打ち必須、だが敵は謎の次元犯罪者。

こちらは非殺傷設定となっており敵は気を失うただけだが相手は恐らく殺傷設定。

互いに互いを仕留める一撃を放ったのならば死ぬのはこちらだけ。

勝負と言うにはあまりにも理不尽な戦い。

だがシグナムは攻撃を回避することなど頭に無かった。

あるのはただ一つ、全力で強者を倒すことのみ

「はあああああああああつ！！！」

空中で一歩前進し、左手を振り抜いたシグナムが三種の魔法に飲み込まれた瞬間。

爆音だけがその場を支配した。

買い物を終え、寮に帰ったミナトは真っ先にデスコの元に行った。

「デスコ、出掛けるよ」

「うわぁっ！？ いきなりどうしたんデスカっ！ ミナトっちゃんっ！」

ミナトは答えずに買ってきた物を整理すると紙に何かを書き始める。

「これでよし」

どうやら置手紙らしいそれを書き終わったミナトはデスコの手を握り外へ連れ出す。

「ミナトっちゃんっ！ いったいどうしたっていうんデスカっ!？」

「ちょっとね、気になることがあるから一緒に来て」

ミナトはそれだけ告げると足早に寮を後にした。

## 第十話 シグナムVSエミールその二（後書き）

何かに勘付いたミナト。

## 第十一話 シグナム発見（前書き）

ミナトが主人公なのにエリオがメインな感じですよ。

## 第十一話 シグナム発見

「セツテ。シグナムさんたちはあっちに行っただね？」

「間違いない」

仕事に空きができたエリオとセツテはシグナムが次元犯罪者を発見、追跡中との報告を受けたので暇つぶしに覗きに來ていた。

セツテはともかく、エリオは飛行魔法を使えないため改造バイクを走らせていた。

もともとティアナが使っていたバイクだが新しいのを買ったのでいなくなったとエリオが譲り受けたものであり、エリオが自分で改造して様々な機能を搭載した違法バイクに造り替えたのだがそれはまた別の話。

現在はエリオが運転しているバイクにセツテが後ろから抱きついている状態となっている。

「僕はその次元犯罪者はたぶんミナトたちの知り合いだと思うけど、セツテはどう思う？」

「どうでもいい」

そっけない態度にエリオは苦笑する。

パートナーになってからしばらく経つがセツテは自分が興味関心を抱いたこと以外に関してはとことん無関心を貫いている。

（もつといろいろなことに興味を持った方が人生を楽しめると思っ  
けどなあ……）

セツテは小言を聞くと微妙に不機嫌になるのがわかっているのでエ  
リオは心の中に思うだけで何も言わない。

「見えてきた」

「……わあ……」

セツテが言う前にエリオも視認していた。

燃え尽き灰となった森の一部を。

「これは非道いな……」

近くにバイクを停車させてエリオは原形を留めずに完全なる焦土と  
なった森へ足を踏み入れる。

背中にセツテが抱きついたまま。

「……セツテ、離れて」

「嫌だ」

それ以上は何を言っても無駄だと察したエリオはそのままの状態  
で焦土の調査を始める。

焼け焦げた後にはかすかだが魔力の残滓<sup>ざんし</sup>が残っている。

（シグナムさんがやったのかな……？）

烈火の将の異名を持つシグナムの火力ならば森を焦土に変えることくらいはわけがない。

（……）  
（だけど意味も無くシグナムさんが森を燃やすとは考えにくいし……）

疑問を抱えたままエリオ更に調査を進める。

燃え尽きた木々からは魔力の残滓以外の情報を得ることはできそうにないので、今度は周りに何か落ちていないかを確認する。

「エリオ、あれはなんだ？」

セツテがある一点を指差す。

エリオの視線がセツテの指の先を追ってみると、灰の土の中に人の様な物体が埋まっている。

「大変だ。急いで助けないと」

慌てて埋まっている人の元へ駆け出すエリオ。

灰を掘り返してみると緑色の服を着た子供が徐々に姿を現し始める。

「大丈夫ですか、生きていますか？」

「……うう……」



エリオが声を掛けてみるとかすかなうめき声が返ってきた。

（かなり衰弱すくじやへしているようだが何とか生きているみたいだ）

急いで子供を抱き上げたエリオは子供をセツテに渡す。

「セツテ、この子を本部に連れて行って治療をしてあげて」

「ん。わかった」

短く頷いたセツテは来た道を逆方向へ高速で飛んで行った。

一人残されたエリオはシグナムとアギトの搜索を続けながら思考する。

（さっきの子供……偶然この場にいたとは考えにくい……とするとたぶん彼はミナトの　　）

「……………」

思考にふけりながらもその耳はあまりにも小さく儂はかないその声を聞き逃しはしなかった。

「シグナムさんっ！　聞こえているのなら返事をしてくださいっ！」

耳に届いたその声の正確な位置を把握するためにエリオは大きく声を張り上げた。

「……………エリ……………」

小さな小さな細い声からエリオはシグナムの位置を捉え、そこに急行する。

シグナムが倒れたいたのは焦土の森から少し離れた茂<sup>しげ</sup>みの中。

無残に裂かれたバリアジャケットに砕けたレヴァンティン、隣には気を失っているアギトがいた。

アギトは比較的軽傷だが、シグナムはいつ意識を失ってもおかしくは無い。いや、むしろいつ死んでもおかしくないと言えるほどの重症だった。

「少し待っていてください。今運びますから、意識を強く持つてくださいっ！」

「……………」

強く呼びかけるエリオだったが、シグナムは咽喉を焼かれほとんど声が出せない。

（どうする……今すぐ治療しないと持ちこたえられない危険が高い）

回復魔法の使えないエリオに残された選択肢は二つ。

一つは二人を抱えて全速力で本部に戻ることに。

だがこれは魔力である程度緩和されるといえど、シグナムがエリオのスピードに耐えられる保証は無い。

もう一つはエリオ一人で本部まで戻り、医療班を連れて再度ここに戻ってくることに。

こちらの選択は単純計算で先ほどの選択の二倍の時間がかかるという欠点がある。

どちらにするべきか

「……迷っている時間はないな」

エリオは数瞬考えた後に、二人を連れて本部まで戻る選択を選んだ。

「ちょっと待ってほしいな」

「っ!?!」

今まさにリミッターを外して駆け出そうとしたエリオは急に掛けられた声に硬直した。

「治療だったら僕にもできるから」

「ミナト……」

「大丈夫デスよっ！ ミナトっちは嘘を言ったりはしないデス

からっ！  
」

「……………」

当たり前の様に姿を現したミナトとデスクに多少の警戒心を抱きながらも素直にシグナムたちを地面に下ろした。

## 第十一話 シグナム発見（後書き）

のんびりとしたペースで続いています。

## 第十二話 シグナム治療（前書き）

流石は暴君の使い魔……治療が拷問にしか見えない……

## 第十二話 シグナム治療

重傷を負っているシグナムと軽傷のアギトを横に寝かせた後、ミナトはその身体を一通り調べて、意識の有無を確認する。

「この人                    ええつと？」

「シグナムさんだよ。“烈火の将”シグナム。僕も昔、戦い方を教えてもらったことがある先生みたいな人だよ。」

「そう、それでこのシグナムさんだけど                    」

ミナトは至極真面目な顔で。

「甘いお菓子が食べられない、とかはないよね。」

素っ頓狂なことをエリオへ尋ねた。

「……………うん。確か好き嫌いは無かったと思うけど……………」

戸惑いながらも自身の記憶をたどって答えるエリオ。

「ミナトっちさん？ そんなことを聞いてどうするつもりなんデスカ？」

問いただしたのはデスコ。

その言葉を聞いたエリオは治療方法を聞いていないのにどうしたさつきあれほど自信満々にミナトを信じてなんて言えたのか疑問を抱

くも心の中で黙殺した。

きつとまともな答えなど返ってこない。

デスコのミナトへの信頼は理屈ではなく精神論の問題だ。

共感できないものの理解はできなくもない。

「もちろん、これを残さずに食べてもらうためだよ」

ニツコリ笑って携帯袋の中から取り出したるは

「……エクレア？」

シュークリームのバリエーションの一つで細長く焼いたシューにカスタードクリームなどを挟み、上からチョコレートを掛けた一口サイズの洋菓子。

甘くておいしいからエリオも結構好きなお菓子なのだが

「……それを今ここで取り出したのには何か理由があるの？」

「もちろん。この状況でボケられるほど僕の神経は図太くないよ」

頭痛がしてきたので頭を手で押さえるエリオを尻目にミナトはエクレアをシグナムの口に無理やりねじ込もうとする。

しかしなかなか思うようには口を開かせられず、エクレアを食べさせることができない。



「デスコ、シグナムさんの口を開かせて」

「はいデスッ！」

デスコはその小さな両手を使って強引にシグナムの口を目一杯開かせる。

開ききった口の中にエクレアを詰め込むミナト。

この光景を見て治療風景だとわかった人がいるのなら眼科か精神科に行くことをお勧めする。

第三者であるエリオは、もしかしなくてもお菓子を使った殺人事件の現場に居合わせているんじゃないだろうかと考えていた。

「よし、入りきった。デスコ、咀嚼そしゃく」

「わかったデスッ！」

頭と顎あごを掴んで良く噛ませるデスコ。

細かく噛み砕けたと判断したミナトは携帯袋の中から今度は飲料水を取り出し、シグナムの口の中に流し込む。

「ぐぼふあっ!?!」

意識が無くとも苦しさから飲料水を吐き出しそうになるシグナムの口を押さえつけ更に大量の飲料水を投入する。

「とにかく飲み込んでください」

「飲む込むデスよ」

寝たきりの老人をいじめる鬼嫁の所業を思い浮かべるエリオ。

（治療。目の前で行われているのは治療なんだ）

と自己暗示を掛けることで自分を納得させようとしていた。

「む…むぐうつ!？」

飲料水を流し込まれ無理やり口を動かされてはシグナムも口に含んだエクレアを咽喉の奥へ通すしかない。

口内に広がるクリームのは甘さは普段のシグナムならかすかな笑みを浮かべて食べただろうが今は単なる拷問道具にしか思えない。

やがて全てを咽喉の奥へ流し込むと                      変化が起こった。

「っ!？」

シグナムの身体が光に包まれ、みるみるうちに傷が塞がって行く。

「なんだ？ これは……」

体中を蝕んでいた苦痛は傷口と共に消え去って行き十秒もしない間にシグナムの傷は完全に癒えていた。

「気分はどうですか？」

ミナトはシグナムの顔色をうかがいながら確認のために尋ねた。

「あ、ああ。問題ない。むしろ調子が良くなったほどだ」

シグナムは念のために立ち上がってみるが、やはり痛みはまったくない。

「すごいな……、これほどの回復魔法を使えるとは……エリオ、彼らは新メンバーか？」

「客人です」

驚嘆の声でエリオに訊いてみるとエリオは一時の間もおかずに即答した。

「？ 客だと……」

「はい」

エリオの態度に訝しむシグナムだったが追及しても望んだ答えは返ってこない。エリオの雰囲気から判断できた。

「そうか……いずれにしろ世話になった。私は」

「あつ、自己紹介はしなくても大丈夫です。エリオから大体は聞きましたから」

「むっ……そうか……」

名乗れないことに不満を覚えながらもシグナムは口を噤む。

エリオはシグナムが助かったことに心から安堵すると同時に。

エクレアなどで瀕死だったシグナムの傷を治療したミナトとデスコに対して改めて戦慄を覚えるのだった。

「大丈夫だよ、エリオ」

エリオの表情から何かを察したミナトはエリオに耳打ちする。

「心配しなくても、毒は入っていないしやばい薬を使っているわけでもない。強いて言うなら」

「

ミナトは苦笑しながら。

「地獄で作られたお菓子だからかな」

不安全開の言葉を囁くのであった。

## 第十二話 シグナム治療（後書き）

なんとも不安にさせる一言をいったミナトでした。

第十三話 ふうん、そうなんだ。(前書き)

シグナム復活。

### 第十三話 ふうん、そうなんだ。

「そうだエリオ！ ここにいた次元犯罪者はどこにいった！？」

唐突に焦ったシグナムの大きな声にデスコはビクツと震えた。

「なっ、なんデスカ！ 敵デスカ！？」

あわてふためくデスコと壊れたレヴァンティンを構えながら周囲を警戒するシグナム。

慌ただしい二人とは対照的にミナトとエリオは静寂に包まれている

エリオはシグナムが探している人物がこの場にいないことを知っており、ミナトはエミールゼルのことを知らないもののシグナムと戦ったのが仲間の誰かだということを推察していたからだ。

「アギトッ！ 起きろ！」

「う……ううん……」

「シグナムさん、大丈夫ですよ」

アギトを叩き起こしユニゾンしようとするシグナムを落ちつけようとエリオが話しかける。

だがシグナムはそんなエリオのゆったりとした態度が気に入らなかつたらしく

「何を言っている！ エリオ！ 敵がどこに潜んでいるのかもわからないんだぞ！！ あれほどの使い手……皆に牙を向けたなら相当な惨事を引き起こすことになるぞ！！」

（まあ実際、みんなの内誰かが街中で暴走でもしたらシャレにもならないだろうしね……）

シグナムの慌てようは間違っていないと心の中で肯定するミナト。

「落ち着いてください。いくら相手が次元犯罪者だったとしても無意味に破壊活動を行うと決めつけてはいけませんよ」

エリオの言葉はある意味正論だったが、実際にエミールと闘い瀕死になったシグナムは頭に血が昇っており

「そんな悠長なことを言っている暇などない！！ エリオ！ 今すぐここにいた奴を追え！ それと管理局に応援を要請するんだ！！」

まったく耳を貸そうとはしなかった。

「だから落ちついてくださいシグナムさん。いくら脳筋戦闘中毒者バトルジャンキーといっても仮にも騎士でしょう？」

「む……むう？ なにかいま物凄いことを言われた様な……？」

エリオはエリオで毒を吐いていたがシグナムは気付かない。

「それよりも戻りましょうシグナムさん。部隊の人たちはやてさんたちも心配していますよ」



「だ、だがしかし」

なおを食い下がろうとするシグナムに

「これ以上ガタガタぬかすなら僕が貴女を半殺しにして上げても良いんですよ？」

笑顔で、しかし言葉には一切の感情を込めずに言い放った。

「……っ！　そう、だな……すまなかった。エリオ……」

「いえいえ、誰にでも頭に血が昇って冷静な判断ができなくなる時がありますから。お気になさらないでください」

「……ああ」

微笑むエリオと消沈するシグナム。

そんな二人の様子を横から見ていたミナトとデスコは。

「……エリオっちゃん、なんだかすごく怖い気がするデスよ……」

「奇遇だね、デスコ。僕もエリオは僕以上に悪魔に見えるよ」

爽やかな笑顔を浮かべるエリオに二人は戦慄を隠せなかった。

「では戻りましょうか、皆さん」

その場にエリオの言葉に反対する者はいなかった。

「遅い」

「非道いなセツテ。それでもかなり急いで戻ってきたんだよ」

本隊と合流したミナトたちを待っていたのはセツテのそんな言葉だった。

「それでセツテ。さっき救助した子供はいまどこにいるの？」

「医務室で横になっている」

シグナムには聞こえない様に声を潜めて尋ねるエリオ。

「そっか……それじゃあどうにかしてシグナムさんとは会わせない様にしないと……」

「？ なぜ？」

「いろいろと事情があるんだよ」

「そうか」

明らかに誤魔化しているだけのエリオをセツテが問い詰めないのは単純に興味が無いから。

「でも救助したのが女の子だったらしつこく問い詰めるんだろうね……」

エリオとセツテの様子から何となく察するミナト。

「? ? どういうことデスか?」

デスコは意味がわからず困惑中。

「簡単に言つとねデスコ。そこにラヴがあるってことさ」

「なるほどー!! ラヴデスか!! これもラヴってことなんです  
ねー!!」

瞳を輝かせるデスコにミナトは微笑みながら頷いた。

「シグナムさん、アギトは僕が医務室まで連れて行きますから、シ  
グナムさんは今回の件を先に報告しておいてください」

「んっ? ああ、わかった。エリオ、よろしく頼むぞ」

眠っているアギトをエリオへ手渡しした後、報告の為に歩き出すシ  
グナムを見送るミナトたち。

「さて、とりあえずこれでしばらくはシグナムさんが暴れるのを防  
ぐことができたわけだけど」

「エリオ、もしかしてあのシグナムさんって人のこと嫌いな?」

毒舌ばかり口にするエリオに不安を覚えたミナトが尋ねてみる。

「まさか。僕にとってシグナムさんは尊敬すべき師匠であり越える

べき目標の一つで、からかうと楽しい人だと思っているよ。……………

…………… ちょっとだけウザいと思う時もあるけど」

本心から言っていることがわかったミナトはそれ以上何も言わずに失笑するだけだった。

「ああ、それともう一つ付け加えておくと

」

「?」

「シグナムさんは僕から見ても女性的な魅力に溢れる可愛い人だとも思っているよ」

疑問符を浮かべるミナトにエリオはその一言を付け足した。

第十三話 ふうん、そうなんだ。(後書き)

これもうエリオ君じゃないですね……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7238u/>

---

次元戦記ディスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

2011年11月27日14時53分発行